watch!

夏川優希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｗａｔｃｈ！

【Ｎコード】
Ｎ５８７１Ｚ

【作者名】
夏川優希

【あらすじ】
妹に彼氏が出来た！
俺はものすごくあせる。いや、シスコンとかじゃなくて。
純粋に心配なんだ、妹の彼氏の命が。

1話　発表

「お兄ちゃん！私、彼氏できたんだ。」
妹は紅茶の入ったカップ片手に笑顔で俺に残酷な言葉を発した。
俺は血の気が引いていくのを感じた。
「そ……それ……じ、冗談だよな……？」
俺は食べかけのビスケット片手に、無理やり笑って見せた。引きつってるのが自分でも分かる。

「今日はエイプリルフールじゃないよ、お兄ちゃん！」
笑ってる。でも俺の笑いとは正反対のまばゆいばかりの笑顔だ。

「い、いや……そういう事じゃなくて……。」
「もう！シスコンも大概にしてよね！」
怒らせてしまったようだ。妹は座っていたソファから勢い良く立ち上がると、ポニーテールを揺らしながらリビングから飛び出していってしまった。

妹の飲みかけの紅茶だけが残った。
「本当に……そういう事じゃないんだよ……。」
持っていたビスケットが手をすり抜け床に落ちてゆく。
砕けたビスケットを眺めながら途方にくれた。

そう、俺はシスコンじゃない……と思う。
純粋に心配なのだ。

妹の方じゃない。妹の彼氏の命が。

1話　発表（後書き）

初めて書いた小説ですので拙いところが多々あると思います。
厳しい批判や、誤字脱字など何かありましたら是非ご指摘下さい。
感想等もいただけると嬉しいです。

2話　懇願

「おい、頼むよ田中！お前人脈広いしさ」
俺は頭を深々と下げてお願いしている。なのに田中は一向に首を縦に振らない！
そして田中は俺に目もくれずに鏡を見ながら前髪のV字バンクを整えながら言う。
「嫌だ。何で俺がお前のシスコンに付き合わなきゃいけないわけ？」
田中は『面倒くさいです。お帰り下さい。』といわんばかりの顔をしている。
「シスコンとかじゃないんだって本当に！これは人の命を守るためであってだな」
田中は即座に反論してくる。
「なんで妹の彼氏を探るのが人命の話になるんだよ。」
「そ……それはだな、色々と事情が……」
田中はさげずんだような目で俺を見た。周りの人間の視線も痛い……。
「とにかく、これ以上凛ちゃんに干渉しないでやれよ。俺は凛ちゃんの味方だからお前に協力はできない！」

俺はトボトボと屋上に向かった。屋上に行くまでの暗く、じめじめした廊下の空気が俺の「がっかり感」をさらにあおってくる。
「おお！圭介、どうだった？」
見覚えのある癖毛の友人を発見すると、俺は少し安心して顔がほころんだ。さらなる安心を求め、友人の下へ走った。

「全滅。凛のヤツ田中にも根回ししてた。」
俺はフェンスにもたれ掛かって伸びをした。そしておもむろに双眼鏡をカバンから取り出し、凛のいる教室の方を見る。カーテンが閉まっているため、凛の姿は見えなかった。
海斗はごろんと横になって笑った。
「ハハハ。やっぱりか。凛ちゃん相変わらず抜け目ないねぇ。」
俺は凛の正体を知っている数少ないこの幼馴染にも情報収集を手伝ってもらっていたのだ。
「海斗の方もダメだった？」
海斗は困ったように頭をかいた。
「うん。色んな人にあたってみたけど、みんな『知らない』か『教えない』のどっちかでさぁ。」
俺達は2人揃ってため息をついた。
「そうか……。弱ったな。どうしたもんか。みんな俺をシスコン認定するしさ。」
俺はフェンスにもたれ掛かったままズルズルと足を滑らせて最終的に座り込んだ。
空が青い。汗で湿ったシャツに風があたって涼しい。
心地よさで俺はほぼ元気を取り戻した。
「それは仕方ないよ。圭介、普段から凛ちゃんのこと監視しすぎなんだもん。昼休みに双眼鏡で妹の教室のぞく兄貴なんか普通いねえよ。」
海斗は困ったように笑う。
「だって中学の時あんなことがあったんだぜ？もう心配で心配で。」
あのときのことを思い出して、俺は鳥肌が立つのを感じた。
「気持ちは分かるけどね。とりあえず弁当食おうぜ！聞き込みに走り回ったから腹減った。」
俺達はその言葉を合図に弁当を広げた。

「このままじゃ中学の時の惨劇が繰り返されてしまう。なんとか凛の彼氏とコンタクトを取らなくてはいけない。」
俺は卵焼きを口にほお張りながら力強く演説する。

「まぁ、それには賛成。彼氏が誰なのかわからないと対策の仕様が無いからね。それに、あの惨劇は出来ればもう見たくない。」
海斗はパンをかじりながら苦笑いした。
「でも、向こうも色々策を巡らせている様だ。人に聞いてもムダなら自分達の足で探すしかないよ。」
海斗はニヤッと笑う。

俺もニヤッと笑った。

「よし、尾行するか！」

3話　尾行

「……尾行ってなんだかワクワクするな。」
俺は小声で、しかし興奮気味に呟いた。
「あぁ、小学生の頃2人で巨乳のお姉さんの後をつけて家を突き止めたこと思い出すな。」
海斗もニヤニヤしながら小声で話す。その声はテンションの高さを物語った。
俺達は凛から30メートルほど離れたところから凛の様子を伺う。
「しかし、本当に凛ちゃん彼氏と会うのか？」
海斗はちょっと顔をしかめた。
「凛が彼氏と会わない日なんて存在しないさ。中学の時だって毎日毎日毎日毎日彼氏に会いに行ってたんだぜ？彼氏が友達と遊びに行く時だって無理矢理付いていったし、どうしても会えない日でも彼氏の家にはりついて監視したりさ……」
俺はまるで怪談話でもするような言い方をした。この恐怖を海斗にも分かってもらおうとしたのだ。
「え？そんな事までしてたのか。恐ろしいな。」
海斗は恐怖を感じ取ってくれたようだ。俺は満足して少し得意げに笑った。
「ああ。まさに恐怖だっただろうな。あ！道曲がる。追うぞ！」

俺達は見失わないように走った。

角を勢い良く飛び出すと何かがみぞおちに当り俺はそのまま倒れこんでしまった。
俺はしばらく何が起きたのか分からず地面に突っ伏していた。
下からうめき声が聞こえる。

あれ？転んだ割にはどこも痛くないな……
「おい、圭介！はやく起きてやれ、窒息しちまうだろ！」
海斗の言葉でようやく「みぞおちに当たった何か」と「俺の下でうめいている何か」が人だという事に気付いた。
俺は急いで立ち上がった。
「わっ！ごめんごめん、大丈夫ですか？」
俺の下にいたのはふんわりしたボブヘアーの小柄な女の子だった。
あんだけ派手にぶつかったのに、女の子に大きな怪我はないようだ。
女の子が背負っていた身長に不釣合いな大きなリュックがクッションとなり、頭や背中を守ってくれたらしい。
ぶつかった相手に手を差し伸べる。あれ？同じ学校の制服だ。それに、この顔どっかで……？

「わぁ、飯島さんじゃないか。どうしたのさ、こんなところで？」
海斗がいち早くこの女の子の正体に気が付いた。
ああそうだ、思い出した。隣のクラスの飯島さんだ。あんまり話したこと無かったから気が付かなかった。
飯島さんはためらいがちに俺の手を取って立ち上がった。
「いや、ちょっと散歩に……岡田君と松島君こそ。そんなに急いでどうしたの？」
飯島さんは服についた砂を払いながらギリギリ聞き取れるくらいの小さい声で話す。

俺達は顔を見合わせた。
最初に海斗が口を開く。
「いや、ちょっと最近体力落ちてたから走り込みをね！」
その言い訳はちょっと苦しくないか？でもここは合わせるしか……

「そ、そうそう！ついでにどっちが速いか競争しててさ。それでぶつかっちゃったんだ。ごめんね！」

「そうだ、怪我とかない？大丈夫だった？結構派手に転んでたからさ。」
海斗が話をすりかえた！良くやった海斗！
「うん、とりあえず大丈夫そう。それじゃあまた明日ね。走りこみ、頑張って。」
飯島さんは足早に去っていく。
あぁ、妹の姿はどこにも見当たらない。
「ダメだったな。」
俺はため息混じりに呟いた。
「まぁ凛ちゃんの事だ。そんなに簡単に探し出せるわけ無いだろ。気長にやろうぜ。」

しかし、そんなに悠長にしている時間はないようだ……。
凛の行動がおかしくなっているような気がする。
携帯をいじる頻度も増えてきたようだ。
凛は彼氏からメールの返事が来なくなると、心配になってそれまでの2倍のメールを送りつけてしまうらしい。1通返事しないごとに2倍。考えただけで恐ろしい。
まぁメールの返信をちゃんとすれば問題ないのだが……つい、忘れてしまうこともあるだろう。
中学の時は最終的に3分に1回程度メールを送りつけていたそうだ。
彼氏には悪いが、凛の体力と執念に感心してしまった。
最近、部屋にこもってばかりだし……心配だ。
何をやっているのだろう……。

4話　暗闇

「おーい、凛？ご飯できたから呼んで来いって母さんが……。」
凛は電気もつけずにパソコンの画面を見つめている。
「今日はご飯いいわ。」
凛は無機質なパソコンの光に照らされて怪しげな雰囲気を帯びている。
「ご飯いいって……外で食べてきたのか？」
俺は凛の部屋に足を踏み入れる。するとようやく凛の部屋がいつもと違うことに気が付いた。
「おい……なんでこんなにたくさんゴミがあるんだよ？」
凛の部屋の片隅にゴミ袋が５つもあった。凛はゴミを溜め込むタイプではない。俺は血の気が引いていくのを感じた。
「お兄ちゃんには……関係のないことよ……。触らないで！」
俺は伸ばしかけた手を引っ込めた。凛は凄く恐い顔をしている。俺が手を引っ込めたのを確認すると、凛は視線をパソコンの画面に移した。
「大丈夫よ……。ちゃんと仕分けたら自分でゴミ置き場に捨てておくから。」
俺は凛の部屋の異質な空気に耐えられなくなり、出て行くことにした。これ以上ここにいても何も得しない。
俺は去り際にパソコンの画面をチラリと見た。凛はグーグルアースでいろいろな角度から誰かの家を見ている。俺の知らない家だが……まさか、彼氏の家か？
「あぁ、そうだお兄ちゃん。シスコンも大概にしてって私言ったよね？」
俺は足を止めて振り返る。冷や汗が止まらない。
「な、何のこと？別に俺なにも……」
凛がこちらをにらみつける。

「とぼけないでよ！次私を尾行したら許さないから！」
あまりにも大きな声を出したので俺は驚いて声が出なくなった。
「もう用が済んだら出て行って。早く！」
俺は急いで凛の部屋のドアを閉め、走って凛の部屋から遠ざかった。
尾行は大失敗だったようだ。凛を怒らせてしまった。
それにしても……あの大量のゴミ、あれはきっと彼氏の家の……。
俺は恐くなって考えるのをやめた。

5話　焦燥

「海斗！俺はどうしたら良いんだあああ」

この秋晴れの空の下、圭介だけが嵐に遭ったように取り乱している。大方、彼氏の事無理矢理聞きだそうとして「お兄ちゃんなんか嫌い！」とか言われたんだろう。

「なんだよ。また凛ちゃんか？」

「そうなんだよ！尾行がバレちゃって、昨日から口きいてくれないんだよおおお！しかも、しつこく話しかけたらフライパンで頭殴られたんだよ！見てコレ！酷いと思わない？」

圭介が髪を掻き分けて頭を俺に突きつける。よく見ると確かにたんこぶが出来ていた。派手にやったなぁ。

圭介は今にも泣き出しそうだ。たんこぶが痛いからというよりは凛ちゃんに口きいてもらえないのが辛いのだろう。いっつも否定するけどこいつってやっぱりシスコンだな。

「後つけてたのバレてたのか……。」

圭介は相変わらず慌てている。

「海斗、どうしよう！凛が携帯をいじる頻度も増えてきたし、昨日部屋に彼氏の家のゴミがあるの発見しちゃったんだ！グーグルアースで彼氏の家見てたし、このままじゃマジで彼氏の事殺すかもしんねぇ！」

圭介が涙目になってきた。本当にヘタレだなぁ……。

「いやぁ。まだ大丈夫だって、ちょっと落ち着け。」

取り乱す圭介をなだめながらドアの方を見やると、飯島さんが俺らの教室に入ってきた。

飯島さんは凄い剣幕でまっすぐこちらへ来る。昨日ぶつかったこと

怒ってるのか……？
彼女は俺達の前で止まると一瞬立ちすくんだが、意を決したように昨日の１０倍以上の大きな声で話しかけてきた。
「け、圭介君！話したいことがあります！放課後、屋上に来てください！」
それだけ言うとポカンとしている俺と圭介を置いて走って行ってしまった。
「な……なんだったんだ……」
圭介はまだ何が起こったのか分からないようだ。さっきまで飯島さんが立っていた空間を見つめながら呟いた。
「飯島さん、この前のことで怒ってんのかなぁ……」
圭介はさっきよりもさらに落ち込んでいる。
「いいや、違うね。」
俺はニヤッと笑った。
あの発汗、顔の赤さ、声の大きさ、苗字呼びからいきなりの名前呼び、そして髪のセットの丁寧さ……
俺は落ち込む圭介を横目に呟いた。
「おもしろくなりそうだ！」

6話　杞憂

放課後、俺達は言われたとおり屋上へ向かっていた。
「怖いなぁ。怒られないかなぁ。」
俺は心底ビクビクしていた。
あんなに顔真っ赤にして「屋上へ来い」って……
怒ってるに決まっている！
なのに海斗はなんだか機嫌が良かった。鼻歌まで歌っている。
「なぁ、もし怒られたら海斗も一緒に謝ってくれよ？ジュースおごるからさぁ。」

海斗は俺の顔を見るとニヤッとした。
「お前って本当鈍感だよな？」
……訳が分からない。
「はぁ？なんで今鈍感の話が出てくるんだよ？」

屋上へのドアを開けて周りを見回すと、飯島さんが柵に寄りかかって空を見ていた。
俺達が来たことに気づくと慌てて柵から背中を離して髪をささっと整えるとこちらへ向かって歩いてきた。

飯島さんは俺を見て微笑んだ。
「来てくれてありがとう。」
そして海斗を一瞥すると低い声でボソッと呟いた。
「……岡田君も来たんだ。」

「あぁ、邪魔ならどっか行くけど。圭介がどうしても一緒に来てくれって言うからさ。」
海斗はニヤニヤを一生懸命我慢しているように見える。
なんでこの状況で笑っていられるんだよ……。

「それで、話って何？」
海斗がさっそく話を進めてしまった！
ちょっと展開が速すぎるよ、心の準備がまだ……
「圭介君！昨日、凛ちゃんの後つけてたんでしょ！？」

俺も海斗も想定外の言葉にただ呆然とした。
俺は急いでそれを否定した。これ以上シスコン認定されるのはまっぴらだ！
「ち、違うよ？走り込みを……」
「ごまかさないで大丈夫だから！私、圭介君の味方よ！」
飯島さんは1歩こちらへ歩み寄ってきた。俺はちょっと怖くなって一歩後ずさる。
すると見かねた海斗が間に割って入ってくれた。
そして俺が言いたかった言葉を海斗が代わりに話す。
「どういうことかな？何か知っているの？」

飯島さんはにっこり笑った。……怖い。
「ええ。ぜーんぶ知ってるわ！中学の事件も、そして今現在の彼氏もね。」
昨日や今日の休み時間とは全く違うハキハキとした飯島さんに戸惑った。
飯島さんってもっと大人しくて、控えめな子だと思っていたんだけど……。どうやら、そんな感じじゃないようだ。
俺があっけに取られているのを尻目に海斗が問いただす。
「なんで中学の事を知っているのかはとりあえず置いておこう。そ

れで、今の彼氏って誰なの？」

「……今から私についてきてくれる？」

7話　足音

ただの告白だと思ったのに、なんでこんな事になってんだよ。

赤々と色づいた紅葉が風に揺れている。

そして、圭介は飯島と並んで歩きながらクレープを食べてる。周りはカップルだらけだ。

俺は2人の後ろを1歩ほど間隔を空けてついていく。

……どう考えても俺だけ浮いてるよなぁ。

飯島は凛ちゃんと凛ちゃんの彼氏がいそうな場所を巡っていると言っているが……圭介とデートしたいだけじゃん。

俺は後ろから嬉しそうに笑っている飯島を観察しながら色々と思考をめぐらせていた。

「屋上に呼び出したのは告白の為」という予想は外れたが、「圭介のことが好き」というのは間違っていなかったようだ。まぁ、良く考えればほとんど面識も無いのに告白するというのは不自然だな。

それにしても、凛ちゃんの彼氏を知っているというのは本当だろうか？デートのための嘘……にしてはやりすぎだし、「中学の事件」を知っているのはごく限られた人物だけだ。きっと彼氏を知っているというのは本当なのだろう。

では、何故こいつが凛ちゃんの彼氏を知っている？友人伝いに聞いたのだろうか。

飯島はけして社交的な性格とは言いがたい。どちらかというと大人しい、目立たない子だ。普段は。

だから屋上で饒舌に話し出したことや、今、圭介に積極的にアプローチしているのに驚いている。

これも「愛」の力だというのか？

凛ちゃんを見てきた俺としては、「愛」の力を否定は出来ない。

「おい、海斗？海斗？」
圭介の呼ぶ声で俺はハッと我に帰った。飯島がいない。
「飯島さんは？」
圭介は驚いた顔をして答える。
「トイレ行ってくるって言ってたじゃん。どうしたんだよボーっとして。」
俺はため息をついた。圭介……何も考えずにバカ正直に飯島のデートに付き合ってたのかよ。まぁ圭介らしいけどな。
「色々考えてたんだよ。なんで飯島さんが凛ちゃんの彼氏知ってるのかとか。」
圭介はアホ面で手をたたく。
「あー！全然考えてなかった！そういえば、何で凛の彼氏の事しってんのかな？」
……こいつ、やっぱりアホだ！俺はさらに大きなため息をついてイライラをおさめようと努力した。
「まぁ、このしょうもないデートに付き合ってりゃ最終的には答えに辿り着くんだろうさ。そうじゃなかったらとんだ時間の無駄だけどな。」
すると背後から足音が聞こえた。飯島が帰ってきたか。
飯島の顔なんか別に見たくも無かったので俺は圭介がどんな顔をするのか気になり、圭介のほうを見た。
ニヤニヤしながら手を振っていたら足を踏んづけてやろうと思ったが、圭介はニヤニヤするどころか驚愕を顔に浮かべて直立不動のまま凍りついていた。それを見て何か異常事態が起こったとようやく気が付いた俺は後ろを振り返り飯島のほうを見る。
飯島の隣にいたのは……知らない男と手をつないだ凛ちゃんだった。

8話　彼氏

強い風が吹き、紅葉が舞う中、飯島さんと凛、そして見知らぬ男が並んで歩み寄ってくる。俺は一生懸命求めて、あれこれ詮索していた物が突如として目の前に現れたことに驚き、固まった。海斗の方を見ると同じように固まっていた。
飯島さんは無邪気に笑いながら手を振る。
「圭介君！連れてきたよ。」
凛は恥ずかしそうな顔をしてうつむいている。……手、つないでるし。
凛と手をつないでいる「彼氏」と思われる男は俺に向かってお辞儀をした。凛は、はにかみながらこの男の紹介を始めた。
「お兄ちゃん、こちらが私の彼氏の飯島悠斗君よ。」
彼氏？このくらそーなヤツが？俺の苛立ちに比例するように風が強くなっていく。その風に乗って凛の頭についた紅葉をあの男が取った。そして凛はまた嬉しそうに微笑んだ。ますます腹が立つ。
凛の「彼氏」は、背は俺より高いが薄っぺらい感じでなんだか弱そうだ。とても凛の暴走を止められるとは思えない。
俺が嫌味の１つでもかましてやろうと思ったその時、凛の一言で何を言おうとしたのか忘れてしまった。
「もう！お姉さんの頼みじゃなかったら絶対紹介なんかしなかったのに。お兄ちゃん、悠斗に変なこと言わないでよ？」
ん？お姉さんなんてどこにいるんだ？あれ？飯島って……
俺は訳が分からなくなくなって凛の彼氏を凝視した。
飯島さんは風で乱れた髪を手ぐしでセットしながら微笑んだ。
「悠斗はね、私の弟なのよ。姉弟共々仲良くしてね。」

9話　姉弟

「え……？弟？」
圭介が呟く。口をポカンと空けて何がなんだか分からないといった風だった。
俺もいささか驚いたが、聞いてみれば簡単なことだ。そりゃ、姉ならば弟の彼女を把握していてもおかしくは無い。そしてシスコン圭介が凛ちゃんの彼氏を探しているという事を聞き、うまく利用して圭介とお近づきになろうと策をめぐらしたという所だろう。
俺はくだらないデートに付き合わされた事に少し腹を立てていたので嫌味を言ってやった。
「弟さんだったんですかぁ。だったらこんなに時間かけて探さなくても携帯で電話したらよかったんじゃないっすか？」
「携帯の充電無くって。それに、時間かけた方が驚きも増すでしょう？サプライズしたかったの。」
飯島は余裕の笑みで答える。俺は「嘘つくなクソ女！」と口から飛び出そうになるのを押さえながら微笑み返してやった。
圭介はアホ面で凛ちゃんの彼氏と喋ってる。
「あんまり似てないですね。身長差すごい……」
飯島は圭介が自分（と弟）に興味を持ったと思ったようで弟を押しのけ、横から嬉しそうに答えた。
「うん、よく言われる。私は母似で悠斗は父似なの。」
そんな家族紹介いらねぇよ。
俺は凛ちゃんとその彼氏が2人でイチャイチャ喋っている時を見計らって圭介をグイッと引き寄せ、耳元に小声で話しかけた。
「おい、凛ちゃんの彼氏に警告しなくていいのかよ？」
圭介は思い出したように小さく手をたたいた。
「そうだった。でも凛がいたら話せないよ。変なこと言わないでって怒られる。」

それはそうだ。じゃあどうするか……。
「私に言ってくれれば私から悠斗に伝えるけど？ここだと凛ちゃんに聞こえちゃうし、いったん2人と別れて別のところで話しましょ。」
飯島がひそひそ話に乱入してきやがった。しかもまだデートを続ける気か！
「あぁ、良い案だね。じゃあお願いしようかな。」
圭介が承諾しやがった！しかし、俺にも良い案が浮かんだわけではなかったので素直に従わざる他ない。もう1人で帰ってやろうかとも思ったが、ただでさえアホな圭介がこの狡猾な女に何か悪いことをされるんじゃないかと心配で帰るに帰れない。それにしても、最初からこいつらが姉弟だって気付いてたらこんなデートしなくてもサラッと警告を伝えてもらえたのに……。

結局近くのドトールに入り、3人でテーブルを囲むこととなった。飯島がにらんでくる。帰れといわんばかりだ。しかし俺は無視して涼しげにコーヒーを飲んでやった。コーヒーを飲めない圭介は何も知らずにのん気にココア飲んでやがる。
しばらくその状態が続いたが、ココアを半分ほど飲んだところで圭介が沈黙を破った。
「飯島さん、悠斗君に伝えたいことなんだけど・・・」
飯島は圭介に話しかけられたのが嬉しかったのかニッコリ笑った。
「何かな？それから、悠斗も私も飯島だからややこしいじゃない？私の事は香織って呼んで。」
うわっ！弟を利用して名前呼びを勧めてきやがった！本当にずうずうしい女だ。それに気付かず、アホ圭介はなんのためらいもなくうなずいた。
「じゃあ香織ちゃん、悠斗君に伝えて欲しいんだ。凛は危険だって。少しでも他の女の子と話せばもの凄く嫉妬してその女の子に嫌がらせするし、メールの返信が遅れるとメールの量が2倍になるし、凛

とのデートを断ったりしたらその日1日中監視してくるし。中学の時なんか、凛が付き合ってた彼氏が他の女の子と遊びに行ったのがバレて、金づちで彼氏を殴り殺そうとしたんだ。俺が凛を止めたから男は肩と腕に打撲を負っただけですんだんだけど、凛は本気で殺そうとしてた。頭を確実に狙ってたから。俺が土下座して謝って、凛と別れさせるって約束したから警察沙汰にはならなかったけど本当に凛は危険なんだよ。」

圭介が珍しく真面目に話しているのに飯島はまだ夢心地といったようだった。よほど名前で呼ばれたのが嬉しかったようだ。ムカツクから俺も名前で呼んでやるぜ。

「香織はさ、弟が危険にさらされているのに冷静だね。今の話結構ショッキングな内容だと思ったんだけど？」

飯島……いや、香織は俺にまで名前呼びされたことに驚き、そして次第に不機嫌そうな顔になった。お前がややこしいから名前で呼べっていったんだろうが！

「だから、最初に言ったじゃない。私は全部知っているって。今の話も全部凛ちゃんに聞いたわ。」

圭介は驚いて飲んでいたココアを吐き出しそうになった。むせながらも、涙目で香織に問う。

「し、知ってるのに、別れさせようとか思わなかったの？」

飯島は圭介のほうを向いて微笑む。本当に表情のころころ変わる女だ。

「思わなかったわ。だって彼女がいながら他の女と会う男が悪いのよ。凛ちゃんの気持ち、すごく良く分かる。」

この言葉には流石の圭介も少し引いたようだった。恐らく、圭介も俺と同じことを思ってるだろう。

こいつは危険だ。凛ちゃんタイプだ！

１０話　曇天

屋上を冷たい風が通り抜ける。だいぶ校庭の木々の葉が落ちていて冬の気配を感じさせる景色になってきた。そろそろ屋上で飯食うのも辛くなってきたな……。

「なぁ圭介。凛ちゃんなんて言ってた？」

海斗がいつもの焼きそばパンをかじりながら問いかけてきた。

「あー。なんかうまくいってるみたい。メールもちゃんと返してくれるってさ。携帯ばっかりいじってたのも、メールしてたんじゃないんだって。」

俺は食い終わった空の弁当箱をササッと片付けながら答えた。

鉛のような重たい曇天の空を見上げると頬に何か冷たいものが当たる。

「あちゃー。雨降ってきやがった。中入ろうぜ。」

海斗は食べかけの焼きそばパンをかばうようにして走り、校舎の中へ入っていく。俺も後を追って校舎めがけて走った。一瞬、誰かの視線を感じたような気がして周りを見回したが誰もいない。俺は気のせいだと思いそのまま校舎の中へ入っていった。

海斗は3分の1ほど残っていた焼きそばパンを口に押し込むと強くなってきた雨を横目に見ながら屋上の前の人気の無い廊下に座り込んだ。それを見て俺も隣に座り込む。焼きそばパンを飲み込んだ海斗がため息をついた。

「今日の天気予報で雨降らないって言ってたから俺傘持ってきてねえよ。お前傘2本持ってない？」

俺はロッカーに折り畳み傘がある事と、今朝母さんに無理矢理傘を持たされたことを思い出した。

「あぁ、あるある。1本折り畳みあるから貸してやるよ。」

海斗は目を輝かせた。

「おお！サンキューな！良かった良かった。風邪引くかと思ったぜ。」
そんな話をしていると遠くから誰かがこちらへ向かってくるのが見えた。
「あれ？香織ちゃんかな？こんなところでどうしたんだろ？」
海斗は露骨にいやそうな顔をした。どうやら香織ちゃんの事あんまり好きじゃないみたいだ。
「あ、圭介くんやっぱりここだったんだ。」
香織ちゃんが手を振りながら小走りにこちらへ向かってくる。
「どうしたの？何か用？」
俺が問いかけると香織ちゃんが微笑む。
「今日ね、凛ちゃんがうちへ来て夕食を一緒に食べることになったの。だから圭介くんもこない？今日はお母さんもお父さんも仕事で帰りが遅くなるんでしょう？」
ううむ。確かに今日、凛が夕飯を作ってくれなかったら俺は何も食べられないまま寝ることになる。コンビニ弁当という手もあるがやはり温かい手料理が食べたい。凛と彼氏の動向も探りたいし、ここはお言葉に甘えよう。あれ？そういえば前にもこんな事が……
「うん。行くよ！是非行かせて下さい。あと、出来れば海斗も連れて行きたいんだけど……」
これには海斗も香織ちゃんも驚いたようだ。最初に海斗が口を開いた。
「別に俺は良いけど……。なんで俺もいくんだよ？」
俺は周りを見回して俺らのほかに誰もいないことを確認すると小声で話し始めた。
「中学の時さ、凛が彼氏の家に遊びに行ったことがあったんだ。その時、彼氏の部屋で凛がエロ本発見しちゃってさ。怒り狂って彼氏の首絞めて気絶させた事があったらしいんだよ。だから、もし凛が暴走したら海斗も一緒に止めて欲しいんだ。海斗は俺より力強いし、何かあったとき頼りになるからさ。」

俺は手を合わせて海斗に懇願した。
「頼む！ついてきてくれ。飯島さん、良いよね？」
飯島さんは嫌そうな顔をしていたが俺は気付かないふりをした。飯島さんには悪いが、もし凜が暴走したら俺では太刀打ちできない！
飯島さんは俺の必死さを分かってくれたのか、弱弱しく笑うと小さく頷いてくれた。
そして飯島さんが頷くのを確認すると海斗も困惑気味に小さく頷いた。
「じゃあ決まりだ！飯島さん、海斗よろしく頼むね！」
俺は2人との温度差をうすうす感じながらも1人はしゃいだ。

11話　雷雨

海斗、俺、香織ちゃんが並んで座り、向かいに凛と悠斗君が2人仲良さげに座っていた。
香織ちゃんがにっこり笑いながらなんだかよく分からない黒いものを差し出す。
「ほとんど凛ちゃんが作ってくれたんだけど、このしょうが焼きは私が作ったのよ！」
……しょうが焼き？この黒いのが？
香織ちゃんをチラッと見ると微笑みながらこちらを見ている。食え、という事らしい……。
助けを求めて海斗を見ると俺と目をあわさない様にしながらも、必死に笑いをこらえていた。俺を助ける気はさらさらないらしい。
俺は意を決して箸で「自称しょうが焼き」をつまむ。……肉をつまんだ時の手ごたえではない。
見た目も手ごたえも完全に木炭だ。しかし、微笑んでいる香織ちゃんを裏切るわけには……。
俺は目をつぶってえいっと口に放り込んだ。

ま、まずいいいいいいいい！！！
もちろん美味しいわけがない。知ってたし、覚悟してたけど想像以上だ……。
焼きすぎで肉は炭と化しているし、砂糖を入れすぎて味がおかしくなっている。
しかし、微笑んでこちらを見ている香織ちゃんの前で吐き出すわけには行かない。俺は必死に飲み込み、笑って見せた。海斗が笑いを

こらえるのに必死で顔が真っ赤になっている。２口目をすすめられる前に話題を変えなきゃ……

「ね、ねぇ！凛と悠斗君、どっちから告白したの？２人の馴れ初め、聞きたいなって！」

凛ははにかみながらも答えてくれた。

「ええとね、告白は私からだったの。廊下で彼を見かけて一目惚れしちゃって。でも、１回目は振られちゃったの。それから猛アタックして、ようやくこの前ＯＫもらえたのよ！」

嫌な予感がする。

「猛アタックって？」

俺は顔を引きつらせながらも笑顔を作るよう努力した。

「うーんと……これはアタックって訳じゃないんだけど、悠斗とたまたま趣味があってね、まぁそれがきっかけかな。」

……「たまたま」ねぇ。

絶対たまたまじゃないよ……ストーカーしたり、どっかから監視したり、ゴミ袋漁ったりしたんだろ……。下手したらどっかからこの家に侵入したりしたんじゃないのか？そういえば、この前熱心に携帯いじってたのも、悠斗君と話をあわせるために色々情報収集していたのだろうか？もう怖くてこれ以上聞けなかった。

そして俺らは食事を終え、片づけを手伝っていると２階から凛の悲鳴が聞こえた。俺達は急いで凛の声がする部屋へ向かった。

扉の向こうから凛のうめき声が聞こえてくる。

「僕の部屋だ……。まさか！？」

悠斗君が勢い良くドアを開け、中に飛び込む。俺もそれに続いた。

「なんだ？どうした凛！」

凛は震えながら振り返ると彼氏のほうへ少しずつ歩み寄ってくる。

暗くて表情は読み取れない。

凛が1歩歩み寄ると彼氏は1歩後ずさる。そうして2人の距離が縮まらないまま彼氏がとうとう部屋から1歩出たところで段差につまづき、しりもちをついた。
凛が上から彼氏をにらんでいるようだ。しかし、依然表情が見えない。
その時、稲妻が激しい音を轟かせながら一瞬だけピカッと光った。
凛の表情はまさに鬼の形相だった。ヤバイ、暴走スイッチが入った！一体どうして……。
暗闇にしだいに目が慣れてゆき、部屋を良く見るとおびただしい量のポスターやフィギュアに気が付いた。
どれも可愛らしい女の子が描かれている。まさか……？
凛は恐ろしい速さで彼氏に近づき、胸ぐらをつかんだ。
「これは何なのよ！あなたの部屋に私以外の女がいるなんて許せない！」
そう言い放つと怯える彼氏を突き放し、部屋の壁に飾ってある巨大なポスターの前に立った。
ポスターを一瞥すると勢い良くポスターを剥がし、大きな音を立てながらビリビリと破り捨てた。彼氏が情けない悲鳴を上げる。凛はその声を聞き、さらにスイッチが入ったらしい。凛は叫びながら走り回り机に置いてあるフィギュアを全て床にたたきつけた。さらに、フィギュアが大量に並べられた凛の身長よりも大きな棚を倒す。もう部屋は滅茶苦茶だ。そして、ベッドに横たわる水着の女の子が描かれた抱き枕を発見すると怒りが頂点に達したようだ。
抱き枕を狂ったように叫びながら踏みつけた。しかし、抱き枕なのでいくら踏みつけようとも壊れたりしない。凛は抱き枕が踏みつけども形を変えない事に気がつき、机の上にあったハサミを手に取ると哀れな水着の少女に向かってハサミをつきたてた。彼氏は、無残に破れていく抱き枕を見つめながら聞き取れないくらい小さい声でやめろと呟いていた。だんだん呟きが大きくなっていく。
「やめろ……やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ

やめろおおおおお！！」
最後は悲痛な叫びになった。
凛がズタズタになった「抱き枕だった物」を彼氏の方へ投げる。そしてあの眩いばかりの笑顔を向けた。
「次はお前だ」
凛がハサミを手にゆっくりと歩み寄ってくる。彼氏は足がすくんでしまって動けないようだ。ヤバイ、殺される！
「凛、やめ」
俺がけん制する前に何かが俺の横を風のように走り抜けていく。
海斗か！やっぱり呼んでおいてよかった、と思ったが良く見ると俺のすぐ隣には棒立ちの海斗がいる。じゃあアレは……
「いい加減にしなさい」
香織ちゃんだ！
香織ちゃんは素早く凛の前まで行くと凛のハサミを持った手をつかみそのまま背負い投げてしまった。凛は綺麗に弧を描き、ベッドに飛び込んでいく。

俺達は色々なことがいっぺんにおき、処理が追いつかずにただ呆然としていた。凛ですら、どうして自分が宙を舞ったのか分からないという様子だった。

12話　余韻

昨日の雷雨が嘘だったように空には雲1つ無く、穏やかな風がほとんど葉の無くなった木々をかすかに揺らした。暖かな日差しが2人を照らす。海斗が神妙な顔で、おそるおそる昨日の話題を持ちかけてきた。

「なぁ、海斗。凛ちゃんなんて言ってた？」

俺はあくびをしながら昨日の凛の様子を思い出した。すると、あくびはため息に変わる。俺は心配になってきて、素早く双眼鏡を取り出すと凛の教室の方を見た。男子がバカ騒ぎしているだけで、凛の姿は見当たらない。双眼鏡を持ったまま海斗の質問に答えた。

「それがさぁ、香織ちゃんに酷く叱られたのか凛が珍しくシュンとしちゃって。俺とほとんど話さないまま寝ちゃったんだよ。だから俺達が帰った後の事も、彼氏と仲直りできたのかも分からないんだ。」

そう、あの後香織ちゃんに凛と悠斗君と3人で話がしたいって言われて、海斗と俺は帰されてしまった。そして、俺は昨日の香織ちゃんの見事な背負い投げを思い出した。

「香織ちゃんって柔道とかやってたのかなぁ。昨日のヤツ、すごかったよな。」

海斗も気になっていたようで、話に食いついてきた。

「ホント、あれは凄かった！あんな小さい体で、あの凛ちゃんの暴走を一瞬で止めたんだもんな！」

俺も激しく頷く。いくら双眼鏡を見つめていても凛を見ることが出来ないので俺は諦めて双眼鏡をしまい、海斗の方へ向き直った。

「本当だよな。俺ら2人がかりでも止めるのがやっとなのに。あんな小さい女の子がねぇ……。」

海斗が思い出したように手をたたいて体勢を直した。

「そうだ、今日の放課後凛ちゃんの彼氏さんに会いにいかね？凛ち

ゃん図書委員で今日集まりあるから3人で話せるし。この学校の生徒なんだろ？」
俺は昨日の話を思い出した。
「そういえばそうだったな。でも何組かわかんねぇぞ？」
「そんなの1年のやつらに聞けば分かるだろ！身元は割れてるんだからよ？」
海斗がまるで刑事みたいな話し方で答える。
そういえば、彼氏とはほとんど喋っていない。昨日も俺が話しかけても「はい」か「いいえ」以外の単語を発しなかった。まったく、無愛想なヤツだ。
「そうだな、行こうか！俺も1回ちゃんと彼氏と喋ってみたいし、昨日の事で色々と聞きたいこともあるからさ。この機会を逃したら凛抜きで彼氏と話せるのいつになるかわかんねぇし。」
海斗は笑顔で頷いた。
「じゃあ、放課後聞き込み開始だ！」

13話　幽霊

「なぁ、クラス分かった？」
俺は息を切らしながら海斗にたずねる。
「いや、やっぱり皆知らないって。確かにあいつ、この学校の制服着てたよなぁ？」
海斗も肩で息をしながら答えた。
さっきから俺らはずっと走り回っている。色々な1年生に「飯島悠斗はどこのクラスか？」という質問を繰り返しているが誰も知らない、というより、飯島悠斗なんて名前聞いたことがないというのだ！俺達は狐につままれたような気持ちになった。
「悠斗君って幽霊だったりしてな」
海斗が笑う。冗談のつもりだと思うが、妙に真実味を帯びてきた。
俺達の横を通り過ぎて行った女の子を捕まえ、ゲシュタルト崩壊寸前の「飯島悠斗はどこのクラスか？」という質問を投げかけた。

どうせまたダメだろうと思っていたが、意外なことに女の子はあっさりと「8組です。」と答えた。俺達は女の子を二度見してしまった。
「な、なんで知ってるの！？」
俺と海斗が同時に言葉を発した。女の子は俺達があまりにも詰め寄ってくるので怯えてしまったようだ。青い顔で答えた。
「お、同じクラスだし、私の前の席が飯島君なので……。」
なるほど、彼は幽霊ではなかったようだ！
「ありがとう！ものすごーく助かった！」
彼女にお礼を言うと俺達は走り出した。急がないと凛の図書委員の集会が終わってしまう！

「なんだったんだろ……」
少女がため息をつく。
「ねぇ、あなた？」
背後から急に声がして、驚いた少女が後ろを向くとまるで人形のような女の子が立っていた。
陶器のような白い肌、毛先にゆるいウェーブがかかった長い髪、ガラス球のような瞳をしている。
「は、はい？なんでしょ？」
緊張して声が裏返る。それくらい綺麗だったのだ。
「先ほどの方と何のお話をしてらしたの？」
声も透き通るように美しい。
「ええと、飯島悠斗君の教室はどこか、と……」
それを聞くと人形のような女の子は微笑んだ。
「そう、それならいいですわ。どうもありがとう。」
そういうと足早に去っていってしまった。
残された少女は呆然と立ち尽くす。
「本当に……なんだったんだろ……？」

１４話　笑顔

８組の教室をこっそりとのぞく。……ヤツがいた！
「海斗、いたぞ！連行しろ！」
俺は声を張り上げる。海斗もノリノリだ。
「ハッ！飯島悠斗！署までご同行願います！」
悠斗君はもちろん、訳が分からずにオロオロしている。
「ホラッ！早く来い、証拠は挙がっているんだぞ！大人しくしろ！」
そういうと、２人で悠斗君の腕をつかみズルズルと引きずるようにして教室を出て、階段を上った。
「あの、コレは一体……？」
引きずられながら、悠斗君が抵抗もせずに問いかけてきた。俺達はまだ刑事ごっこを続ける。
「話は署で聞かせてもらう！」
海斗がニヤニヤしながら言い放った。

屋上の扉を開き、悠斗君を降ろした。悠斗君は痛そうに肩を回す。そして俺達と目をあわさないようにうつむきながらボソボソと喋りだした。
「ええと……何の用ですか？」
俺達はまだテンションが高めだった。
「おい！お前幽霊なのか！？」
海斗がニヤニヤしながら肩を揺すった。
「……は？」

悠斗君は何がなんだか分からないといった様子だ。俺が補足する。
「お前の事めっちゃ探したんだぞ！なのに誰もお前のこと知らないって言うんだよ！これは一体どういうことだ！？」
海斗と同じように肩を揺すりながら尋ねる。すると、急に悠斗君の声のトーンが下がった。通常状態の時でも声は低めでボソボソと喋るのに、さらに低くなるものだから聞き取るのに大変苦労した。
「僕……コミュ障だから……。」
「ん？コミュショーってなんだ？」
俺は海斗の方を向き、説明を求めた。
「簡単に言うと、他人とコミュニケーション取るのが苦手って事」
悠斗君はうなずく。
「他人と話すのが苦手で、友達いないんです……。だから、同じクラスの人でもまだ僕の事認識してない人もいるみたいで……。お手数おかけして申し訳ありません。」
一瞬沈黙が流れた。雰囲気が一気に暗くなる。さっきまで刑事ごっこしてたのが嘘のようだ。
「そ、そうか。まぁそれは良いとして……。昨日！どうだったの？」
悠斗君は依然として俺達と目を合わせようとしない。
「ええと……凛ちゃんはものすごく姉さんに怒られて、それから部屋の片付けをさせられて……。それから、話し合いをしました。」
「え？なんの？」
海斗が尋ねる。
「あの……フィギュアとかポスターの事なんですけど。……凛ちゃんは全部捨てろって言うんです。でも僕はそれが嫌で……。嫌だって言ったら凛ちゃんが包丁取りに行こうとするし、それに姉さんがまたキレて投げ飛ばすしで結局進展はないままです。お兄さん達も一緒に説得してくださいよ！」
初めて悠斗君が俺と目をあわした。あの惨事の後でフィギュア捨てるの嫌って言えたのか……なかなか度胸のあるヤツだな。
俺はニッコリ笑った。

「いやだ。」
悠斗君は崖から突き落とされたような顔になった。
「ど、どうしてですか！」
「俺は凛の味方だもん。それに、喧嘩の火種はないほうが君の為でもあるのだ。分かるか？」
俺は腕を組んでふんぞり返った。海斗が調子に乗った俺の頭をはたく。
「おい、かわいそうだろ。交渉してやろうぜ。それに、これ以上交渉を長引かせたほうが危険だろうが！」
俺は元の体勢に戻り、ニヤニヤを顔からにじませながら言った。
「冗談だよ！まぁ、君は確かに凛にぴったりの男だ。このまま別れさせちゃうのも惜しいから、仕方ない。協力してやるよ。」
悠斗君が不思議そうな顔をする。
「え？なんで僕が凛ちゃんにぴったりなんです？どう見ても僕みたいなボッチ、学校のアイドルの凛ちゃんには不釣合いなんじゃ……。」
「君はじつにバカだな！」
俺はドラえもんの声マネをしながらそう言い放った。悠斗君はビックリしてる。
「凛の彼氏に友人が多いのはむしろマイナスなんだよ！特に女の子と彼氏が楽しげに話してるところなんか見たら大変なことになるし、友人との約束を優先してデートを頻繁に断るのもいただけない。だから、君みたいに友人０で、むしろ凛に依存するくらいの人がちょうどいいんだよ。」
俺はニッコリ笑った。しかし、悠斗君は微妙な顔をしている。
「まぁ！協力してやるって言ってんだから素直に喜べ。な？」
俺は悠斗君の頭をポンポンとたたいた。悠斗君は俺に初めて笑顔を見せる。……初めての笑顔がフィギュアの事ってのもどうかと思うが……。

その時、いきなり校舎へと続くドアが勢い良く開いた。

……凛だ！

15話　審判

「悠斗？ここにいたんだぁ。探したんだよ？さぁ帰りましょ。」
凛が俺らには目もくれず、悠斗君に微笑みかける。
「あぁ、俺らお邪魔かな？じゃあ悠斗君、また後日……」
俺はそそくさと帰る支度を始めた。
「凛ちゃん！ちょっとここで話したいことがあるんだ！」
悠斗君が今まで見たこともない自信満々の表情で凛に宣戦布告する。
俺は固まった。
「ね？お兄さん！」
悠斗君が俺らに微笑みかけた。
おいおい……冗談じゃねえよ！まだ心の準備が……。
「なあに？……もしかして、あのくだらないお人形さんたちの事かな？」
凛が微笑む。あわわわわ……スイッチが入りかけてるよ！
俺はあわてて悠斗君に耳打ちする。
「ゆ、悠斗君？凛に立ち向かうにはまずじっくりと作戦をだな？」
「くだらないなんて言わないで下さい！アレは僕の宝物なんです！」
見事に無視された。というか、こちらも変なスイッチが入ったようだ。
今ここで暴走状態になったらどうするんだよ！昨日みたいに背負い投げして場をおさめてくれる人はいないんだぞ？
俺はあせりと苛立ちでおかしくなりそうだった。見かねた海斗が俺にささやく。
「落ち着け、お前ならきっとレフリーになれる。さぁ、可愛い妹とその彼氏の仲介役になってやれよ、お兄ちゃん！」
海斗の顔は、どう見ても笑いをこらえている。くっそ海斗のヤツ、人事だと思いやがって。なんかあったらお前も一緒に凛を押さえつけてもらうからな！

しかし、海斗の言うとおり俺が2人の仲介役をしないと埒が明かない。よし……。
俺は覚悟を決めた。そして高らかに宣言する。
「お前ら、そこに向かい合って座れ！俺が仲裁してやる。」
海斗がピューと口笛を吹き、「お兄ちゃんカッコイイ」と俺を茶化した。

16話　妥協

「なによ、お兄ちゃんには関係ないじゃない。これは2人の問題だわ。」
凛がブツブツと不平を言う。俺は凛に喝を入れた。
「俺はお前の兄だぞ！もし、悠斗君とお前が結婚したら悠斗君は俺の弟になるんだ。関係ないとは言わせないぞ！」
「け、結婚……」
凛が目を輝かせながら悠斗君と向かい合い、座った。よし、論点をずらすことに成功したぜ。
「じゃあ2人の言い分を聞かせてもらう、まずは凛。」
凛はまだ少し目を輝かせながら話し始める。
「ええと……あぁ、人形の事だったわね。全部捨てて欲しいわ。だって私以外の女を見て欲しくないんだもの。」
相変わらずおかしな理由だ。人形にまで嫉妬するとは……。
「では、悠斗君、言い分を聞かせてくれ。」
俺は出来るだけ厳かに言った。緊張感を出すことにより、凛が暴走しにくい環境を作ろうと思ったのだ。……有効かどうかは分からないが。
悠斗君がためらいがちにボソボソと喋る。
「ええと……僕は捨てたくないです。別にフィギュアを捨てたからって凛の事をもっと好きになるって訳じゃないし……。僕の趣味を奪わないで欲しい。」
凛の目に光がなくなってきた。素早くそれを察知した海斗がフォローに入る。
「ええと……悠斗君はこれ以上ないくらい凛ちゃんの事が好きなんだよ？だからフィギュアがあったって別にいいじゃないか。そういう意味で悠斗君は今の発言をしたんだ。分かるよね？」
ナイスフォローだ海斗！俺は心の中で呟く。

しかし、凛は依然として不満そうな顔をしている。
「嫌なものは嫌なの！部屋であの人形達が悠斗を見つめてるかと思うと……もう……」
凛が頭を抱えて下を向く。海斗が困惑の表情を浮かべながら凛の説得に当たった。
「凛ちゃん、あれは全部人形だよ？プラスチックとか、樹脂とかで作られている作り物だよ？動かないし、悠斗君を奪ったりもしない。洗濯ばさみが部屋に置いてあるのと同じなんだよ？」
凛は海斗の言葉に激しく反論した。
「だったら人間もそうだわ！ただの肉の塊、包丁で刺したり高いところから落とせば動かなくなる。でもそんな奴らでも海斗さんの大切なもの奪ったら嫌でしょう？」
「おい、凛！屁理屈言うなよ。論点がずれてるし、そういう問題じゃないだろ？海斗も困ってるし……。」
「屁理屈なんかじゃないわ。私、間違ったこと言ってないもの。海斗さんが困ってるように私も困ってる。お互い様よ。」
ダメだ、話にならない。何か、何か妥協案は無いか……？
「なぁ……凛？何か条件を出すのはどうだ？例えば、フィギュアを捨てないならブランドのバッグ買ってくれ！とかさ。じゃないとどっちも譲らないじゃん？」
俺はなるべく優しい話し方で提案した。凛は俺の言葉を聞くと、少し考えた後ゆっくりうなずいた。
「じゃあ……条件、ある。」
凛はさっきまでとは打って変わり、静かに答えた。悠斗君が身を乗り出して凛を見つめる。
「条件は？」
海斗が凛を促す。凛は真顔で悠斗君に言い放った。
「部屋に盗聴器つけさせてくれるなら考える。」

17話　選択

「おいおい……何言いだすんだよ、犯罪だぞ？それ。」
俺は口元を歪めながら凛を制止する。でも凛は笑顔で悠斗君だけを見つめていて、俺の言葉なんか聞いちゃいない。
「ねえ、どうする？私はどっちでもいいから悠斗が決めて！」
「ちょっと待てって、他の案も出してやれよ。極論すぎんだろ？」
凛は俺の言葉を聞くと、すごい勢いでこちらへ顔を向けて鬼のような形相で俺を睨む。
「お兄ちゃんが言ったんじゃない。私もかなり譲歩したわ。」
そう言ってまた笑顔を作り直すと、悠斗君の方に向き直って猫なで声で悠斗君に迫った。
「さぁ、早く選んでよ！」
「ええと……それは……。」
悠斗君は戸惑っているのか、挙動不審になっている。
「悠斗君、フィギュア捨てたほうが良いんじゃないか？ずっと監視されてるのなんて嫌だろ！？」
「ええ……でも……」
「悠斗？どっちにするの？早く決めて！」
「ええ！うーんと、」
「プライベートを捨ててフィギュアを取るのか！」
「ええっと……」
悠斗君はあっちを向いたりこっちを向いたり頭を掻き毟ったりしながら思案した挙句、真っ直ぐな目で俺らに言い放った。
「盗聴器、つけてくれ！」
……そんなにフィギュアが大事か。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5871z/

watch!

2012年1月8日22時48分発行